

絶対に畫筆を持つことのない人もある。

かかる素人の立脚地より更に言葉を足せば、あの可愛い少年や少女の頬ぺたをふるらかにしてポツペンを吹く態度や動作に見出たる懐かしい心持をもつて、幼な時代の筆かな年頃の氣になつた『愛』の時代の生活をつづけたいものだ、假令行爲はさなくとも思想の古朽せんとする刹那の氣分は斯くありたいものだ更に、あのマンドリンの音調の如く。神經の焦々とする黄なる響を捉へたいものだ。

論じつめると、セニチメタルなセンスにより多く捉はれた觀念を持つて居るのもよからうと思はる、ローマンチックやクラシックには全然絶對的に拘束されたくない。

みづゑ八十二號に横濱のS K Kと云へる人が素人の繪畫鑑賞に就て狭義な見地と、美術そのものに捧身的になる人々の將來論とも見るべき事を定期的述べられた所信であつた。甚だ困難したから私の所信を述べたまでである。學校がお休みになつたら纏つた繪畫鑑賞論を具體的に申上げたい、素人と云ふ事の社會上の程度問題をも語りたい、併せて日本社會の學究的に參考になる實例を擧げて生活狀態等を論じたい、猶、日本風景と旅の問題を一夕話としたい、之等は特に水彩畫線上の感興問題としたいことを言つて置く

景福品の春

(前承)

在京城

健

堂

生

歩を左側の小門に轉じ、入れれば一大樓あり、之れ則ち慶會樓

にして、京有數の遺物なり、石橋を渡り樓内に入れば、周圍池水右方小丘を作り、二三樹あり、此樓二層にして五十有餘、長さ凡そ二間周圍八尺の大石柱、予想ふ斯る建物を見ざる事を、天井好く彩色を施し美亦言ずもがな、然れども樓上を見るを得ざりき、池中蓮の枯葉水中に垂れ小魚春の暖きに群り戯るを見る、附近迄芝生然して挑樹あれど開花期少し早くして、背後の松石垣を抜きて黄葉を彩り幹赤し、予一枚の寫生をなし樓を辭す、予此の樓を見る度深く想へを乙未の變に走らす、住時國王は難を露公使館に逃れたれど、時の皇妃閔妃は此樓に於て官女と共に戯れ中捕はれ、白丹山下綠松の邊音無く聲無き處に於て殺されたるを、予樓を出て崩垣の側道を辿り、後方廣地に出づ、彼所松林あり、空地芝雜草茂生す、所々崩破の小舎を見る、閔妃の殺されし處に到る、一小舎あり松林密生し日暗きを覺ゆ、予彼半島の女傑を想ふて哀愁の念起らざるを得ざりき、小舎を出て右道せば醉香亭あり、架橋池中樓あり蓮多くして夏期の満開期を思はしむ、

歸路道變へて左側を見しに、早や十數棟の家屋其の蔭ぐなく、今時花園と化す、昨春の頃は好く家屋存し舊官女の舎内に縫取等を行ひ、生計を保ちたれど、今は皆彼等も解散して唯愁寞春草生緑にもあらざる如く、白冉山の綠松は永へに茂れど此宮亦永へあるや否 (完)